

三十年戦争の背景

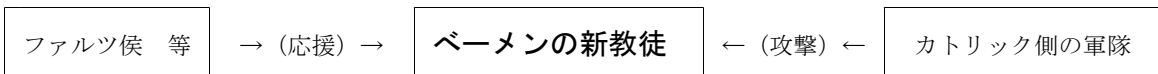
三十年戦争は「最後にして最大の宗教戦争」とも呼ばれる。「30年戦争」ではなく「三十年戦争」と書くようにしよう。

- 17世紀前半に経済成長が止まり、17世紀半ばには、経済・社会・政治の全領域に及ぶ、全ヨーロッパ規模の危機の時代となり、多くの国で戦争や内戦が起きた。以下のような事情で、ドイツの危機はいつそう深刻であった。
- そもそも、12、13世紀に東方植民によりエルベ川以東に移住した農民たちは自由だった。しかし、15、16世紀に領主支配が強化され、エルベ川以東のプロイセンでは、16世紀以降、地主貴族が、輸出用の穀物を生産するために、西ヨーロッパでは解体期にあった農奴制を再強化し（再版農奴制）、農民の賦役労働によって大農場経営を行う【1: 】（グーツヘルシャフト）が広まった。この地主貴族は、【2: 】と呼ばれた。彼らは、ハンザ同盟諸都市や西ヨーロッパに穀物や原材料（造船資材が重要）を供給して利益をあげた。【2】はプロイセン社会の中核を担う勢力である。再版農奴制による西欧市場めあての農場経営はポーランドにも存在した。ポーランドの地主（で貴族）はシュラフタである。
- 宗教的にはアウクスブルクの宗教和議以降もカトリックとプロテスタントの対立は続いていた。

三十年戦争そのもの 1618～48 ヨーロッパ最大の宗教戦争は、ユグノー戦争と三十年戦争である！

発端は1618年。全部で4段階に分けられる。神聖ローマ帝国内の宗教戦争が国際紛争に発展していく。

- 第1段階 ベーメン・ファルツ戦争（ドイツの内乱）** 1618年～23年
ハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝フェルディナント2世（カトリック）は、1617年、新教徒が多い【3: 】（ボヘミア）地方の王を兼ねることになった。【4: 】があるから、法的には彼は住民にカトリックを強制できる！早速皇帝顧問官をプラハに送ってカトリック政策を行わせようとした。怒ったベーメンの新教徒は、1618年、皇帝顧問官一行を市庁舎の窓から突き落とすというプラハ窓外投擲（とうてき）事件をきっかけにクーデターをおこし、反乱軍はザヴォイ公国やファルツ選帝侯などに呼びかけ、フリードリヒ5世などが賛同。これが、発端である。



簡単に言えば、《ボヘミア（ベーメン）の新教徒がハプスブルク家の支配に抵抗して、1618年、反乱を起こした》^{06c}と表現できる。皇帝側が勝ち、主導権を握った。

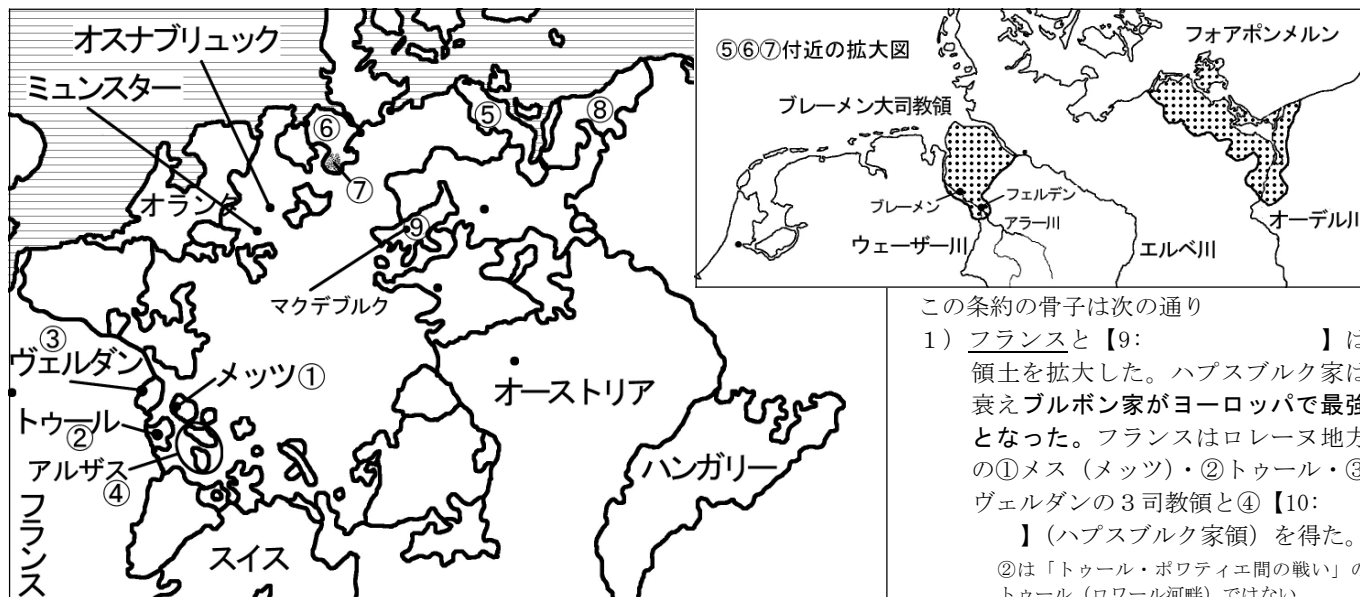
- 第2段階 デンマーク戦争（国際紛争化）** 1625年～29年
【5: 】（クリスチャン4世はルター派）が新教側を支援して介入し反撃し、国際紛争に発展した。神聖ローマ帝国はヴァレンシュタイン（1583-1634 ベーメン出身なのに皇帝側）を傭兵隊長に任命し、皇帝軍が勝利、北ドイツを制覇した。
- 第3段階 スウェーデン戦争** 1630年～35年
新教国【6: 】が新教側を支援して介入。【6】はヨーロッパ有数の強国に成長していた。スウェーデン王は、「バルト海のライオン」と呼ばれた【7: 】位1611-32（グスタフ2世）。フランスと同盟し、新教徒保護を名目にドイツに侵入、連戦連勝を続け、南ドイツまで進撃した。1632年、【7】はリュッツェンの戦いでもヴァレンシュタイン指揮下の皇帝軍を破ったが、彼自身は戦死した。俗説によると、彼は強度の近視で霧の中で部下たちとはぐれ方向を見失い敵中に突出したため、優勢にあったにも関わらず戦死したのだという。なお、ヴァレンシュタインは野心を疑われ、1634年皇帝に暗殺された。
- 第4段階 フランス・スウェーデン戦争（フランスの参戦、全ヨーロッパの紛争化）** 1635年～48年
旧教国【8: 】（リシュリュー、マザラン）が、新教側を支援して出兵。これ以降はとも宗教戦争とは言えない！この時のフランス国王はルイ13世、1643年以降はルイ14世。^{11W}
- 神聖ローマ帝国内の宗教戦争が国際紛争に発展した理由は？
 - ①ハプスブルク家は、ベーメンのみならず、全ドイツで新教徒を弾圧し、強力なカトリック化政策を行ったので、デンマーク、スウェーデン、それにイギリスなど周囲の新教国は介入しなくなった。
 - ②強大化するハプスブルク家と、これに反対する勢力の対立関係。
 - ③フランスブルボン家は、ハプスブルク家のドイツ支配は絶対に許すことができなかった。スペインもハプスブルク家なので、フランスは挟まれてしまう！フランスとオーストリアが手を結ぶ「外交革命」は、遙か先の18世紀半ばである！
- ドイツ国内は荒廃した。
たとえば、グスタフ=アドルフ戦死後のスウェーデン軍はいくつかに分かれてドイツ国内を転戦し、各地で略奪を行った。それは皇帝軍も同じことだった。また、戦後も、解雇された傭兵が略奪をはたらき、ドイツ国内は戦乱と傭兵による略奪破壊で荒廃著しく、国の統一はますます遅れ、大きな課題を残した。
この時代、「略奪」といえば、破壊と性的暴行、子ども（=未来の敵兵）虐殺を当然に含んだ。20世紀でも同じこと。
- 三十年戦争は、双方とも莫大な損害を出し、戦い疲れた中、1648年のウェストファリア条約（ヴェストファーレン条約）で決着した。

ウェストファリア条約

ウェストファリア条約は、ミュンスター条約とオスナブリュック条約の総称である。通例、これらを区別しなくてよい。締結のための国際会議が行われた都市はミュンスターとオスナブリュック。

なお、原語の「ヴェストファーレン」は英語でFar Westである。特定の地名ではない。「極東」(far east)ならぬ「極西」

である（こんなことを小論に書くな）。もちろん、ミュンスターとオスナブリュックは地図に載っている。そのあたり一帯に「ウェストファリア」と印刷してある副教材もあるが、それは「ウェストファリア」という都市を一生懸命探す熱心な生徒がいるからだろう。そんな名前の都市は存在しない。



この条約の骨子は次の通り

- 1) フランスと【9: 】は領土を拡大した。ハプスブルク家は衰えブルボン家がヨーロッパで最強となった。フランスはロレーヌ地方の①メス（メッツ）・②トゥール・③ヴェルダンの3司教領と④【10: 】（ハプスブルク家領）を得た。
②は「トゥール・ポワティエ間の戦い」のトゥール（ロワール河畔）ではない

2) スウェーデンは、⑤フォアポンメルン（オーデル川河口部分のポンメルン地方の西部＝西ポンメルン）・⑥ブレーメン大司教領（ウェーザー川下流域の両岸）・⑦フェルデン（ウェーザー川、アラール川合流点）を得て、事実上バルト海の制海権を得た。これがハンザ同盟を衰亡させ、スウェーデンは北欧の大国となった。これらの領土は、フランスとまったく逆に、レーエンという形で与えられた。

オーデル川河口部を中心に今日のポーランド、ドイツにまたがるバルト海海岸部をポンメルン地方と呼ぶ。この地方の土地は痩せ、少なくとも古代においては交易が可能な海岸部以外には人が住んでいなかった。東隣がドイツ騎士団である。中世においては神聖ローマ帝国の一部。

3) ブランデンブルク=プロイセンは、⑧東ポンメルン・⑨マクデブルク大司教領を得た。

1618年、ブランデンブルクがプロイセン公国を吸収、ブランデンブルク=プロイセンとなる。1701年以降プロイセン王国。No.108で詳述。

4) 【11: 】およびスイスの独立を正式に承認

5) アウクスブルクの和議を確認。さらに帝国内の【12: 】を公認。

ルター派の公認はアウクスブルクの和議（1555）。これに加えてカルヴァン派も公認された。

6) 300を超えるドイツ諸領邦の外交自主権を承認、ひとつひとつの領邦に主権を認めた！

ドイツにおける【13: 】が法的にも確立した。だから、ウェストファリア条約は、「【14:

】の死亡証明書」とも呼ばれる。

神聖ローマ帝国の正式の消滅は、1806年、ライン同盟を結成した西南ドイツ16邦が帝国からの脱退を宣言し、最後の皇帝フランツ2世が帝位を辞退したため。これらはナポレオンによるものである。

ドイツ国内は戦乱と傭兵による略奪破壊で荒廃著しく、国の統一はますます遅れ、大きな課題を残した。

7) ウェストファリア条約は、教皇、皇帝といった超国家的な権力がヨーロッパを統合することを放棄したことを意味する。これ以降、対等な主権を持つ諸国家が、国益をめぐる連合・離反を繰り返すことが当たり前とされるようになる。このように17、18世紀以降の国際関係を定めたことから、これをもって「ヨーロッパにおける主権国家体制の確立」が実現されたと言われる。

また、この条約は近代国際法の元祖であるとも言える。「統合」がない以上、ルールがなければ無法地帯と化すことは明らかである。なお、「ヨーロッパにおける主権国家体制の確立」のきっかけとなったとされるのはイタリア戦争である。

「国際法の祖」とされる【15: 】1583-1645はこの時代を生きた。主著『戦争と平和の法』（1625）は三十年戦争の惨禍を実際に見て執筆された。同書で、戦時といえども守るべき国際法規の確立を主張した。彼は、また『海洋自由論』（1609年）で貿易、航海の自由を主張し、「国際法の父」「近代自然法の父」とも呼ばれる。

【復習】

①イタリア戦争（1494-1559）：おもにイタリアの支配をめぐる神聖ローマ皇帝とフランス王の戦い。1494年のフランス王【1】（ヴァロワ家）のイタリア侵入がきっかけとなり、その後フランス王【2】と神聖ローマ皇帝【3】（ハプスブルク家）との間で激しくたたかわれた。この戦いでは、カトリックのフランソワ1世がイスラーム教国オスマン帝国の【4】と結び、カトリックのカル5世が宗教改革を行ったイギリスの【5】と結ぶなど、宗教とは無関係に国際的なつながりが持たれた。1559年の【6】でフランスがイタリアから手を引くことで終結したがイタリアでのルネサンスは荒廃し以降はアルプス以北の諸国にルネサンスの中心が移った。この戦争が主権国家間の争いとしてたたかわれたため、以後、ヨーロッパ全域にわたって【7】が形成されるきっかけとなった。

②カトー=カンブレジ条約：1559年、フランス王【8】、スペイン王、【9】、イギリス女王【10】が中心になって結んだイタリア戦争の講和条約。スペインはミラノ・ナポリ・シチリア・サルデーニャなどを獲得したがフランスはイタリア進出を断念した。